

ざる村には、藩から之を命ずることもあつた。田地割の方法は、他村より分地人、一に算用者とも地奉行ともいふものを囑託し、田

畠・屋敷一切を實測し、その合盛を定め、蔭場所に至るまで公平に分配するのである。例

へば村高總計百石なれば、高十石又は十石内外の圃十本と定め、圃一本毎に何合歩の田何

百歩として米詰を平等ならしめる。而して持高十石なるものは圃一本を抜き、十石以下の

者は數人を組として一本を抽くこととし、その圃に當る地を將來耕作する。凡そ地元

地と圃地とある。引地は高百石に田六段で、加賀・能登は三百歩を一段とするが故に千八

百歩である。高持の百姓は居屋敷の外此の割合を以て苗代田を希望の場所に定める。故に

圃地に加へない。圃地は引地を除いた餘餘で、百姓全体に分割する。又惣地といふのがあつ

て、特殊の薄田を圃以外に置き、一村の共有となし、その卸年貢は村の萬雜中に加へる。

天保中惣地を禁じて圃地に加ふべきを命ぜられた。請作をなす者は小百姓と頭振とに拘ら

ず、田地割の施行後改めて親作より借受けるを要する。頭振に在つては全然持高のなき

ものたるが故に、己の居住する屋敷すら、田地割毎に之を高主より借受けねばならなかつた。

テンドウイン 傳燈院 金澤鷺町に在つて、運水峯と號し、曹洞宗に屬する。初め登山之

を能管永光寺の山中に建立したが、年所を経て朽廢したので、正保四年同寺の住僧久外煥

良が請うて金澤塩屋町に建立し、寛文十一年更に今の地へ移つた。

テンドウジ 天道寺 ↓アサノガハイナリ

シヤ 淺野川稻荷社。

テンドウジ 傳燈寺 (一)沿革—河北郡傳燈寺(部落名)に在つて、臨濟宗に屬する。山

號は瑞應山。龜尾記に、當寺は延慶元年恭應運良の草創に係る。後醍醐天皇恭應に歸依し

て山林を施捨し給ひ、後光嚴院・後小松天皇は之に禪師號勅賜の繪旨を興へられたが、延

德三年三月伽藍回祿に罹り、その後後柏原天皇再び勅願寺の繪旨を賜うて漸く復古した。

次いでまた荒廢に歸してゐたのを、承應三年前田利常は千岳宗似を請じて再興させ、寺封

四十石を給し、この時もと興國寺派であつたのを改めて妙心寺派となつたと記する。

(二)傳燈寺の格式—明應二年細川政元等將軍足利義隆を幽し、義澄を立てんとした時、義

種は越中に脱れ、翌三年義澄が將軍になつた。同七年三月四日傳燈寺は使僧禪橋元慶

を放生津に派し義種に謁せしめ、義種から傳燈寺を紀伊由良の興國寺と同列ならしめると

の教書を得た。興國寺は恭應運良の師心地覺心の創建した所であるから、之と格式を同じ

くしたのは頗る榮譽であつたわけである。此の如きは傳燈寺の子院たる放生津の興化寺

が、流浪困憊した義種を扶助したことに對する恩賞であると共に、義種は此の年上洛の志

があつたから、その際傳燈寺の力を假りたかつた爲でもあらう。後永正十二年後柏原天皇

は本寺を勅願寺とするの繪旨を賜はつた。これは義種が已に京に入つて、將軍に重任した

後八年の事であるから、その周旋によつたのであらう。

テンドウジ 傳燈寺 河北郡小坂庄に屬する部落。呂名は傳燈寺あるに因る。

テンドウジイモ 傳燈寺芋 名物往來に傳燈寺芋を載せる。河北郡傳燈寺に産する芋を良品としたのである。

テントウヨコウ 傳燈餘光 羽咋郡浦谷妙成寺廿七代心地院日塔の著。上下二卷。妙成寺略縁起・經王寺略縁起・勤行・大會等のことを記したもので、寶曆十二年九月の序がある。

テントクイン 天徳院 前田利常の夫人。徳川秀忠の二女。名は子々姫又は福々姫、後に珠姫。慶長四年三月伏見邸内に生まれた。この年徳川家康は前田利長の質としてその母芳春院を要求し、之に代へるに子々姫を利常に嫁せしめる約が成つた。五年九月利長の家康に謁した時、更にこの事が確認せられ、六年七月子々姫は江戸を發し、徳川氏の老臣大久保忠隣・青山忠成之を送り、金澤からは前田長種・長連龍を越前金津の上野に派し、利長も亦手取川に出で迎へた。子々姫時に三歳。

この旅行の期間を、舊説に七月朔江戸發九月晦金澤着とするのは疑はしい。福井藩の記録には、九月八日その地を過ぎたことに成つてゐるから、發足の七月朔は餘りに早く、到着の九月晦は餘りに遅い。或は九月晦は婚儀を挙げた日でもあらうかと思はれる。夫人は慶長十八年以降龜鶴姫・光高・小姫・利次・利治・滿姫・富姫を産んだが、元和八年三月三日夏姫を挙げた後健康順ならず、七月三日二十四歳を以て逝去した。法號天徳院乾雲淳貞大禪定尼。城南小立野に葬り、香華寺を建て、天徳院といふたが、後寛文十一年野田山に移葬した。

テントクイン 天徳院 紀州高野山内に在る。元和八年八月前田利常の夫人が逝去した時、その遺骨の一部は高野山に納め、寺を建て、天徳院といひ、堯盛坊覺雄を住持とした。

テントクイン 天徳院 (一)沿革—曹洞宗に屬し、金澤上鶴間町に在つて、金龍山と號する。元和八年七月前田利常夫人の逝去した時この地に葬り、翌九年大伽藍を傍に營み、夫人の法號によつて天徳院と名づけ、寺領五百石を附し、巨山泉滴を住持とした。その後藩侯光高も亦こゝに葬られたが、天徳院の墳塋は寛文十一年野田山に移された。尋いで元祿二年前田綱紀は黄檗の僧高泉に設計を命じて堂宇を改築せしめ、七年竣功し、寶曆三年第九代の藩主重靖を寺内に葬り、明和五年二月一日火を失して山門以外悉く烏有に歸し、六年八月再建成就した。塔頭に松龍院があり、寛永九年僧雷源の創立であつたが今は無い。

(二)世代—天徳院の世代は、開山巨山泉滴、世外鐵心道印、二代龍睡愚穩、三代月坡道印、四代中興芳巖祖聯、五代獨明良因、六代大義宗孝、七代雷洲惟默、八代悅巖素忻、九代毒華藏海、十代鵬雲良騰、十一代石叟徹周、十二代大年素有、十三代大應知有、十四代府貫雄道、十五代金嶺慧剛、十六代齡州義宣、十七代保養元隆、十八代希運曇開、十九代嶺外覺林、二十代訥庵道如、廿一代末微默笑、廿二代雲生洞門、廿三代庵崖奕堂と數へられて明治期に入つた。

テントクインモンゼン 天徳院門前 金澤天徳院の門前地である。この地に天徳院の下馬腰掛所があつたから下馬先ともいひ、鎮守白山の祠堂があつて、その祭を下馬の祭といふた。明治元年神佛混淆の禁止後鎮守社を廢